

# 第1回 協働実践研究全国フォーラム・全体会2日目

07/12/02 於：東京外国語大学

## 【パネルディスカッション】

### 「多言語・多文化社会に向けて協働・実践・研究が生み出す ダイナミズム」～協働実践研究はじめの一步～

#### パネリスト（発言順）

◇東京外国語大学特任研究員

東京学芸大学国際教育センター教授 佐藤郡衛

「川崎市ふれあい館」職員 金 迅野

明星大学人文学部人間社会学科教授 渡戸一郎

成蹊大学法科大学院客員教授・弁護士 関 聡介

大木和弘法律事務所・弁護士 大木和弘

明治学院大学教授、四谷ゆいクリニック院長・精神科医 阿部 裕

日本経済団体連合会産業第一本部長 井上 洋

国立国語研究所日本語教育基盤情報センター整備普及グループ長 野山 広

かながわ国際交流財団情報サービス課長 小山紳一郎

早稲田大学文学学術院教授 山西優二

◇進行

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センタープログラムコーディネーター 杉澤経子

---

---

【パネルディスカッション】

# 「多言語・多文化社会に向けて 協働・実践・研究が生み出すダイナミズム」 ～協働実践研究はじめの一步～

パネリスト：佐藤郡衛／金 迅野／渡戸一郎／関 聡介／大木和弘  
阿部 裕／井上 洋／野山 広／小山紳一郎／山西優二

進行：杉澤経子

総合司会・伊東祐郎 ただいまより最後のセッション、全体会を始めさせていただきますと思います。総合司会をさせていただきます、本センター運営委員をしております伊東祐郎です。テーマは「多言語・多文化社会に向けて協働・実践・研究が生み出すダイナミズム～協働実践研究はじめの一步～」ということで、約2時間を予定して、このパネルディスカッションを進行させていただきたいと思います。

このディスカッションの進行は、当センター運営委員でもありますプログラムコーディネーターの杉澤経子が担当します。

杉澤経子 皆様、こんにちは。杉澤と申します。今日のコーディネーターを務めさせていただきます。このパネルディスカッションは、10人も並んでいったい何をするのか。このセッションでは何かまとまった話をするとか、結論を出すということではなく、協働実践研究プログラムは2年間のプログラムですので、今回は中間的なセッションということです。来年の全国フォーラムでその成果の一端をまとめた形でお話することにして、今回は次年度に向けての出発の全体会とさせていただきますと思っています。

全国フォーラムの第1回ということで、基調テーマを「多言語・多文化社会の課題に迫る」に設定致しました。1日目の全体会では協働実践研究プログラムの全体像をセンター長から説明しました。また、午後には各班がどのような課題認識をして、どのような活動に取り組んでいくのかということを分科会などで皆さんに発表しました。

また、全国には各地でさまざまな方がこの多言語・多文化化の問題に取り組んでいらっしゃいますが、ぜひそうした実践者、研究者の方にも発表していただきたいということで、2日目の今日の午後には発表セッションを設けさせていただきました。ただ、今回は第1回ですので、どのぐらいの方にお申し込みいただけるかが私たちはとても不安でしたが、フタを開けましたら、10部屋満杯になる発表者のご応募をいただいたということです。参加したいセッションがあったのに時間が重なっていて残念だったと思われた方も大勢いらっしゃると思いますが、とてもいい発表が行われておりました。少しもったいなかったかなという感じがしておりますので、次回はもう少し工夫が必要かと思いました。このように全国では研究者、実践者がさまざまな形で取り組みをしているということが今日の発表セッションでもうかがわれました。

さて、この2日間のフォーラムを通して、皆様はどんなことをお感じになられたのでしょうか。また、多様な分野の方々と課題の共有などはしていただけましたでしょうか。この協働実践研究プログラムですが、教育、言語、経済、労働、法律、精神医療など、各分野の専門家、実務家の方々に特任研究員として参加していただいています。恐らくこれだけの専門分野の違う人たちが一堂に会して活動するというのはあまりないのではないかと思います。

私自身が1997年に、実はそこに座っている大木和弘弁護士と一緒に「東京外国人支援ネットワーク」という取り組みを始めまして、10年近く東京の外国人相談の現場で活動してきました。その中で最も感じたことは、多分野の専門家や実務家、実践者が協働して活動する以外には、この多言語・多文化社会における課題を解決する方法はないのではないかと思います。私自身は相談に当たれるような専門性は全く持っておりませんが、コーディネーションするという立場から言うと、こういう多分野の専門家が今まで分断的に活動してきていましたが、そういう人たちが出会い、議論をし、そして、共に活動する場自体がないということが大きな課題だと感じてきました。この協働実践研究プログラムというのはそういう場を提供することによって、多文化社会の課題解決に迫れる活動をつくり上げていこうとする試みとも私は考えております。

#### ◆ なぜ参加したか、どんな問題意識を持っているか

また、協働実践研究という、「協働」というのを批判的に見ているということ



杉澤経子

も昨日のセッションで渡戸さんがおっしゃっていましたが、まさに危うい言葉だと思います。簡単に協働といっても、そんなに簡単に協働ができるわけでもありません。いろいろな考え方、解釈の仕方というのがあると思いますが、私自身は協働というのは活動のプロセスの中にしかないものと理解しております。

今回の最後のセッションとなるこの全体会は、まとめをお話するのではなく、まさにこの協働実践研究のプロセスにある、今このときの皆さんの思いや考えを明らかにしていくということを目的に進めていきたいと考えています。そうした意味で、この協働実践研究プログラムは、2006年9月に始まり、1年以上過ぎましたが、この1年ちょっと、またこの2日間のフォーラムを振り返りながら、まさに今日のこの会をスタート地点として、来年の活動に進んでいきたいと考えております。

趣旨説明が長くなってしまいましたが、パネルディスカッションに入りたいと思います。今日来ていただいている方々お1人ずつ、この協働実践研究活動になぜ参加しようと思ったのか、また、どういう問題意識を持っていたのかということをも2分以内で、話していただきたいと思います。

こういう協働というのは、組織と組織で協働しましょうとはなかなかいかないもので、その中に共通の認識を持てる人と人とのつながりの中でしか進まないと思います。この各班の名前は何で人の名前が付いているのかと皆さんに言われるのですが、協働は人から始まるというメッセージも含まれているということでご理解いただきたいと思います。

では、最初に「佐藤・金班」の佐藤郡衛さん、よろしくお願いいたします。

## ◆ 地域でどう教育を支えるか



佐藤郡衛

**佐藤郡衛** 最初に何でこの協働実践研究に入ったのか。答えはひとつです。たぶん全員そうだと思います。杉澤さんに誘われたからです(笑)。で、本音でしゃべっていいというので、しゃべりますが、あまりにも大掛かりなことで、結構大変な思いをしております。お陰で私は東京学芸大学教員ですが、杉澤さんに東京外芸大学という名前まで付けられまして、外語大と学芸大と半分ずつやれと言うんです。

誘われたから参加したではあまり芸がない話ですが、私は魅力があって参加しているのだらうと思います。それは2つです。ひとつは、私は教育を専門にし、外国籍の子どもの教

育に関心を持ってきましたが、教育だけでは解決しないということを痛切に感じています。医療や福祉、労働、さらには法律など他の領域も一緒に考えなければいけないというのを感じているためです。

2つ目は、外国籍の子どもの教育を地域でどのように支えるかに関心があるからです。私は学校現場を中心にしてやってきているのですが、学校現場と地域との連携という、学校を補完することが中心でした。それはもちろん重要なことです。でも、それですと、この多言語・多文化社会という方向性がなかなか見えにくいのです。つまり、地域の側から、例えば、今日の私どものセッションで福岡の例を報告していただいたのですが、いろいろな地域の方々が支援を通してつながっていく。そのことが実は学校を支えていくことになり、そして、それが新しい地域づくりにもつながるのではないかということ、協働実践の中から見いだせないかという思いで、ここに参加しているということです。

#### ◆ 「ニューカマー」の子たちの力づけ

**金 迅野** このプロジェクトのテーマに掲げられている「協働」という言葉を口に出すとき、いくつかの意味で、「あり得ねえ」という感じを覚えます。まずは、私はよく「芸者のようだ」と言われていて、さらに芸風が基本的に「色物」ですから、そのような存在がこのような立派なところに上がってしまっているのか、という意味での「あり得ねえ」ということ。もうひとつは、「多文化」と言いながら、壇上にいるのはなんで「野郎ども」ばかりなのか！（笑）。その意味での「あり得ねえ」です。「勘弁してくれ」という、感じでしょうか（笑）。



金 迅野

私の場合も、杉澤さんに呼ばれたという呪縛のような力はどうしようもなく……。でも、いろいろなかわりで彼女に教えてもらったこともたくさんあって、少しは恩返しになるかなと思って研究会に入ったのですが、気がつくとなんかトンデモナイなことになっていて、少し当惑しています。

私にとっては、いわゆる学校とか地域とか行政の相互の連携というような「立派な」言葉というのはあり得ないという感じを持っていながらも、そのことをやりながら、大事にしたいと思っているのも、自分の身の丈に合わないという意味で「あり得ねえ」という感じなのですが、大事にしたいと思っているのは、「学習サポート」という、「ニューカマー」の子たちの力づけということです。その子

たちの未来を切り開いていく力。人が生き方を模索する際に起きる、伝承と受容の過程で経験のなかに埋め込まれるものについて、私がいままでいろいろな人からいただいたものを想起しながら、いろいろな人と連携しながら、彼らと一緒に新しい関係とか、新しい何かをつくっていったらと思いつきながら参加しています。

## ◆ 地域の活動研究から

**渡戸一郎** 「渡戸・関班」の渡戸です。89年まで旧自治省関連の研究機関におりました。その当時、自治省が始めた地域国際化施策の出発点になった、87年の「地方公共団体における国際交流の在り方に関する指針」を、同省企画室の山口晋企画官と一緒に鉛筆を舐めながら書いたことがありました。それを書くために国内外を問わず、いろいろ自治体の調査をやりました。



渡戸一郎

「指針」が出ると自治体は動き出します。次々に自治省は国際交流に関する指針や大綱を出して、都道府県と政令市は大綱を作りなさいとか、国際交流に頑張っているところはモデル事業としてお金を出すとか、いろいろなことをやりました。

当時は国が自治体に対してそういう形で政策的に働きかけたということがありましたが、今日の私たちの班のセッションで会場の方から、現在の日本の外国人政策は逆に自治体主導になっており、国がフォローをしていないと指摘されました。この間、特に外国人の多い自治体は「外国人集住都市会議」をつくって、国の各省庁に働きかけてきたという経緯がありますが、なかなか国の総合的な政策がうまくまとまってこないということが非常に大きな問題になっています。

私は住民自治やコミュニティ形成の視点から、自治体政策や住民・市民の運動や活動を調査してきました。初めは政策から入りましたが、90年に大学の教員になってからは、活動の担い手や当事者の方たちの調査に移行し、地域のNGOの活動にもコミットするようになりました。その過程で、協働実践研究を自分なりにやってきたような思いがあります。そこでつながった人たちがこの協働実践研究会の中になんかおられます。

私は割と勘がいい方だと思っているのですが、勘がいいと結構いい人につながるなど改めて実感している次第です。皆さんも自分は勘がいいと信じて、今日つながった人を大事にさせていただきたいと思います。変な自己紹介になりました。終わります。

## ◆ 外国人相談に関心

関 聡介 本業は弁護士ですが、なぜこんなところにいるのかというと、直接的な原因は当然、杉澤さんということになってしまいます。もう少しまともな答えをするということになれば、ここに居続けている理由は大きく2つあると自分では思っています。

ひとつは、弁護士を15年間やってきて、普通にやっていると実務ばかり、ふだんの仕事ばかりになってしまい、理論的な裏付けというものからドンドン離れてしまう傾向があるという点です。幸い、数年前にロースクール、法科大学院というものがあるのが日本にできて、我々弁護士も一定程度、大学とつながる機会を提供されているのですが、それでもまだ希薄です。こういうことも含めて、大学とのつながりを保って、少しでも自分の仕事の理論的な裏付けができたということがひとつあります。美しく言えばですが(笑)。

もうひとつは、法律相談に対する興味との関係です。ロースクールで今、私は教員をやっています、よく話すことですが、弁護士何年目になっても、一番難しい仕事は法律相談だということです。法律相談というのは、どういう人か分からない、初めて飛び込んできた人と挨拶をして、話を始めて、30分間で一応法律上の答えなり、何なりの答えを言って、満足して帰ってもらわなければいけないという、とんでもなく難しい仕事で、これは弁護士をやって何年たっても一番難しい仕事だというのは間違いありません。

特に外国人の法律相談というのは、さらに通訳も挟まり、共通の基盤もないという極めて劣悪な条件で、30分以内に満足して帰っていただかなければいけないという点で、大変難しいです。協働実践の研究を通じて、外国人相談に関して、何かひとつでも答えを見つけていきたいと思ひまして、この研究員を続けているということです。美し過ぎて恥ずかしいですが、後でもう少しまともな話をしたいと思ひます。

## ◆ 仕事と関係ないことをする

大木和弘 関さんと同じく弁護士です。僕は関さんよりも1年短い14年のキャリアになります。関さんのようなまじめに仕事の理論的な裏付けをここで、などということは全く考えておりません。仕事以外の場ですから、どうせするならば、なるべく仕事と関係ないことをしたいという思いが強い。



関 聡介

僕は三鷹というところで法律事務所を開業しているのですが、杉澤さんとは隣の武蔵野市の国際交流協会です。外国人相談が始まって以来のお付き合いになります。杉澤さんが僕に声をかけてくるときの僕の役割というのは決まっています、要するに、僕はつぶれ役をすればいいわけです。幅をつくるために僕がいる。ただもう1人、金さんという同じような人がいましたが(笑)。そういうわけで、協働実践研究であるにもかかわらず、僕が単独で人と組まずにやるとゴネるのも、たぶん、杉澤さんは予測しないまでも、覚悟はしていたはず。声がかかった当時、頭に来ていたことのひとつに、教育基本法改正案の愛国心条項というのがありまして、何が頭に来ていたかということ、あれが近代国民国家の人工性を全然理解していない、すごく自然主義的な発想であるということです。当然、国民の人工性は外国人の人工性でもありますけれども。

そういったこととか、あとは僕はプルラリズムで育った、学生のころから言えば、国際政治学の人間で、間違えて法律に来てしまったのです。そうすると、僕的に言うと、もうプルラリズムどっぷりで育ちましたから、多元化していけば、当然、自由化されるはず。ところが、現状を言うと、多元化というか、多文化化というか、この多文化というのも嫌いな言葉で、認識なのか、目標なのか全然分からないので僕は使いませんが、日本にいろいろな国の人が多くなってくると同時に監視・管理社会化が進んでいく。自由になるはずなの、多元性が全然自由につながらないのではないかと。そこら辺の不平不満のはけ口にさせてもらっています。

#### ◆ 医療と地域と教育の連携を

阿部 裕 「阿部・井上班」の阿部です。私も大木さんと一緒に外国人相談というところから入ってきたのです。私は精神科医で、90年ぐらいからずっと日系人の患者さんを診ています。そして、多文化という話になりますと、ここ6～7年、第二世代の子どもだと思いますが、小学校、あるいは就学前の子ども、子どもさんが精神科のクリニックを初診するようになってきました。でも、実際に診てみると、この子はお母さんが不安になったために来院したとか、学



大木和弘



阿部 裕



校でうまくいかないけれども、それは決して精神科的な問題ではないのに来院した子どもなど、いろいろです。そうすると、医療の前にもっと、例えば、学校、あるいは学校以外の生活など、いろいろなところでいろいろな連携を取れば、わざわざ医療の方に来る必要のない子どもがいることをすごく感じていました。そんなときにちょうど杉澤さんからお話があり、いろいろなほかのところと連携することによって、医療に来ないで、家族の問題、地域の問題や学習の問題としてもう少し連携してできれば、もっと予防的な意味で食い止められるのではないかということを感じ、この研究会に参加させていただいています。

### ◆ 自らの提言の行く末を見る



井上 洋

井上 洋 日本経済団体連合会の職員を27年やっています。経済団体の職員というと、企業の人間と同一視されるのですが、私自身は公共政策の研究がベースになっていて、その中で企業のいろいろな要望を聞いて、霞が関や永田町にいろいろ提言しているという役割です。場所柄、大手町、丸の内、霞が関、永田町、こういうところだけで動いていますと、どうしても価値観が同じになってしまいます。そういう価値観の同じ人たちといくら議論しても、なかなか新しい発想が出ないだろうと常々思っていました。

経団連は、03、04年ごろから本格的に外国人受け入れ問題に取り組み始めたのですが、個人的には98年ごろから関心があって、自分のテーマとしていろいろ話をしたり、物を書いてきたのですが、経済界の中ではあまり関心呼びませんでした。どうしてなのかと思っていたのですが、02年に会長に就任された奥田碩会長が、ものすごく関心をお持ちで、「お前ら、知っているか」とただされた。しかし、知っている者はほとんどおらず、私は多少知っているということで手を挙げたら、「では、まとめろ」ということで、04年4月の提言の前に、03年11月に中間とりまとめ提言というものが経団連から出ています。

実はそれを見つけてくれたのが杉澤さんです。書いた者の責任というのが、この分野にはあるのではないかという話を確か杉澤さんにした記憶があります。お役所の方がいたら恐縮です。しかし、お役所のキャリアの方は、2年ぐらいでンドン変わってしまいますが、経済団体の職員は数年は、だいたい同じ分野で活動するので、最初に書いたことを実現するまでは見届けなければいけない。その

中で自分の提言が具体的にどうなるのか見てみたいというのは確かにありました。

そういうことで、今、長野県の上田市に焦点を当てて調査を行っています。正直なところ、まだ地域の行政と企業、あるいはNPOがしっかりと連携できているとは言えません。私が出てきたところで、たぶん、そんなには変わらないと思いますが、取りあえず昨日この全国フォーラムの中で行われた分科会で、行政の方と企業の方が並んでパネルに乗ったというのは大きな第一歩なのかなと思っています。阿部さんという心の問題を扱う先生。昨日も発表していただいた、日系人であり、研究者であるウラノ・エジソン・ヨシアキさん、この方は社会労働ですから、何となく私の市場原理的な分野と3つがお互いに引っ張り合いながら、牽制し合いながら、あるいは協力できるところもあるかもしれませんが、そこで研究を続けるというのはなかなか面白いという感じがいたします。最初はそういう設定を全く考えもせずに飛び込んでしまったのですが、結果として、協働とか実践というような言葉につながっていくのかなと思っています。

#### ◆ 日本語教育の連携を

野山 広 「野山班」の野山です。所属は、国立国語研究所で、ふだん、研究員をやっています。ここでは、特任研究員として入っているわけですが、研究所に入る前に私も文化庁にいて日本語教育の調査官をしていた関係で、地域の日本語教育の問題にかかわることになりました。そこで文化庁委嘱の武蔵野市の日本語教育推進事業を通して杉澤さんと出会ったことがここに結び付いているわけです。周辺にいたいの方はそのときに結び付いたご縁と、先ほど渡戸さんからお話がありました。文化庁に入る前に渡戸先生とお会いしているということがあります。杉澤さんがおっしゃるように、人のつながりというのは協働研究の基本形だと思いますが、どこかでつながったものが必ず何らかの形で社会に何かを訴えたり貢献しようというときにつながって、影響を与えていくということを身にしみて感じています。

私の班は日本語教育プログラムの調査をするということで動いています。これは実は現状を申し上げると、国立国語研究所の日本語教育基盤情報センターでも学習項目グループというのがありまして、そこで日本語教育のカリキュラム、シラバス、項目作りに向けた調査研究をしています。これはたぶん、ここでやって



野山 広

いることと少し違う観点でやっているものと思っていただいてもいいと思います  
が、これと日本語教育学会でも同じように文化庁の委嘱を受けて、日本語教育の  
そういった問題に焦点を当てています。これはこれで日本語教育の中で協働連携  
しないといけないもので、三者三様で違うことをやって、ほとんど連携もなしだ  
と非常にもったいない話で、そういうところをつなぐのも重要な課題になってく  
るだろうと思います。

#### ◆ 多文化ソーシャルワーカー養成を



小山紳一郎

小山紳一郎 「山西・小山班」の小山です。「かながわ国際  
交流財団」というところで十数年、中間管理職みたいなこと  
をやっております。ふだんの仕事は広報の仕事と「あーすぶ  
らざ」という地球市民学習の拠点（横浜市の南部にある施設）  
で、ライブラリーの運営などを行っています。

ここに座っている理由は、まずは杉澤さんという非常に情  
熱を持って語る方から、「一緒にやりませんか」と言われて、  
ふだんから非常にお世話になっていますし、恩返しはこれぐ  
らいしかないだろうということで、「分かりました」とつい  
答えてしまったというのが本音のところでした。それと、「も  
し私が引き受けるとすれば、今後予定している多文化ソーシャルワーカーの養成  
カリキュラム作成なら」と言ったら、杉澤さんが「それでいいですよ」と答えて  
くれたものですから、それだったら仕事に絡めてできるということで、お引き受  
けすることにしました。皆さん、すごく難しいことを言っているのです、私はこの  
くらいにしておきます。

#### ◆ コーディネーター論の研究を

山西優二 早稲田大学の山西といいます。大学、NGO、地域などの場での開発  
教育や国際理解教育の教育実践にかかわっています。佐藤さんから「杉澤論」が  
始まっていますので、最後まで杉澤さんのことについては触れておかなければい  
けないと思うんですが、杉澤さんのいい意味での強引さというのは見事なもので  
す。私が今かかわっています日本国際理解教育学会が今日の1時から研究会をや  
っていて、3時から理事会をお茶の水でやっています。今日は1時の研究会に出  
席しなければならぬということで、こちらに来られないかもしれないと、事前  
に知らせました。すると、「研究会に出て、帰ってきてください。2時4分発の

御茶ノ水駅の電車に乗ると、この全体会に間に合います」という FAX が、杉澤さんから家に入るわけです。見事というか。ですから、私は1時からの会議に出ていて、2時4分に乗るために途中でサッと抜け出さなければいけなかったわけです。09年度の学会の課題研究を引き受けないと帰れないということで、それを引き受けて帰って来てしまったので、また仕事が増えてしまいました（笑）。私たちの分科会はコーディネーター論を視野に入れているところがありますので、一度、杉澤さんをコーディネーターとして徹底的に分析してみたいと思っていますが、それはどうするか分かりませんが、とにかく魅力的な人物だと私自身は思っています。



山西優二

私自身も皆さんがおっしゃられたことと同じことですが、ここに来て思うことは、ひとつは人間が面白い。私もいろいろなつながりの中でこういう人たちとかかわってきて、こういう人たちが集まって、本気でどこまでやるのかなと思いつつ、また何が生まれてくるのかなと期待していることが参加する前提になっています。

もうひとつは、この協働実践研究では、センター長の高橋さんもおっしゃっていますが、研究のための研究であるとか、収奪型の研究はしないということを明言しています。実践と研究を一体化させた実践研究をしっかりとやるんだと。それならば参加しても面白いだろうなという思いが正直言って、私の中にありました。ですから、そういう期待や思いから参加させていただいています。

**杉澤** ありがとうございます。ここぞとばかりにふだんの不満を一気に皆さんに言われているような気分ですが、決して強引であることがいいことではありませんので、コーディネーター論とは切り離していただきたいと思ひますし、また仕事上、声をかけるのは当然だと思ひませんか、皆さん（笑）。だって、声をかけなければ、何も始まらないじゃないですか。ということでご理解いただきたいと思ひます。

今、さまざまな視点をいただきました。例えば、勤がいいと連携協働というのは進むとか、実務家の立場で言うと、実務ばかりやっていると理論的な裏付けが乏しくなってしまうというようなご発言もありました。また、阿部さんは医療の現場にいらっしゃると、医療だけをやっていただけでは解決できないのではないか。その前に学校とかさまざまな領域の人たちとつながることによって、予防的に未然に事態を防ぐことができるのではないかという問題意識。そして、また井

上さんの方からは、同分野の人とばかり活動していたら、新しい発想は生まれな  
いということもお話いただきました。また、さまざまな研究者や行政の方たち  
からは、多言語・多文化社会に対してどういう政策が必要か、どういう施策を打  
ったらいかというような提言がたくさん出てきますが、では、いったい誰がそ  
ういう形に実現していけるのかという問題もあります。

そういう中で、この研究班は研究者と現場の人間の組み合わせになっておりま  
す。この協働実践研究の始まりはこのセンターの開所記念シンポジウムでした。  
そのときにフロアの方から質問がありました。「研究と現場の乖離をどう埋めて  
いくのですか」という私たちセンターに対する問いかけです。私はこの言葉は非  
常に重く受け止めさせていただいたのですが、私自身もずっと外国人相談など、  
実際の現場に携わっている中で、研究者がたくさん入ってくるのですが、フィ  
ードバックがないという不満をずっと持ち続けていたからこそ、その一言が胸に突  
き刺さったわけです。

ただ、逆に言うと、実践の現場の人たちは目の前の課題はよく見えています。と  
ころが、それを全体に分かりやすく論理的に説明し、発信するということが私自  
身もなかなかできないでいました。たぶん、ここに実践者と研究者が連携協働し  
て研究を行っていくという意味があるのかなと感じています。実際に異様な組み  
合わせの人たちもいたりしますが、ごめんなさい、今のはカットです、失言です。  
実際に1年間こういう活動をしていく中で新しい部分を発見したりしています。

阿部さん、井上さんのところのお話がありましたが、労働の研究をしている人  
と経済の人が議論を始めると、議論がかみ合わないみたいな話も出たりします。  
多言語・多文化社会に対して何ができるかという同じ視点を持ちながらも、実際  
の研究の分野が違うといろいろな葛藤や議論が巻き起こってくるということもあ  
って、改めて、こういう場が必要なんだということも実感してきました。私自身  
はその議論の中には、難しく入り込めませんでした。

## ◆ 活動を通じての課題発見は

さて、ここで特任研究員の皆さんが実際の体験をする中で多様な人々と出会い、  
そして、1年間活動をしていく中で得た驚きや感動、疑問や違和感、さらには見  
えてきた新しい課題などがありましたら、1人5分ずつぐらいでお話いただき  
たいと思います。ペアでいるところは掛け合い漫才的にしていただいてもいいか  
と思います。よろしく願いいたします。

## ◆ 自らの出自に照らして

金 「異様な組み合わせ」でごめんなさい（笑）。せめて「異形」と言ってほしかったです。やはり私の存在はこの場には「あり得ねえ」なのでしょう。ロゴスがない人間はパトスで勝負するしかないのですが、これを分けられるのかという話が一方であるのでしょう。ですからここでは、「スッキリくっきり」論理的な枠ではくくれないかもしれない、そういう話をします。



川崎市の南部では、フィリピンを背景に持つ子どもが増えてきています。K君という面白い子がいて、「ふれあい館」の学習サポートに通って、今年、高校に入った子です。現在は高校に通いながら、学習サポートに顔を出して、自分の補習も受けながら、たまに後輩たちに教えています。何を教えるかということ、日本語を英語を使って教えるのですが、どのように教えるかということ、「君、彼女いるの？ いるの、いないの、どっち？」……。こういう会話から日本語を教えられるのですね。こういうのは、野山さん、どうでしょう。日本語的には、美しくないかな。これなんかも異形ですよ。ちょっと懸命になるだけで規範、ここでは規範たる「日本語」ですが、そういうものから気がつくときとズレてしまっている。

この種の「異形」に出会うと、完全に一致しているわけではありませんが、少なくとも接点を持ち得るような、ある記憶がよみがえってきます。つまり、自分の記憶のことです。私は朝鮮学校に中学まで通っていました。中学3年ぐらいになると、いわゆる「異形」のチャンピオンみたいな者ばかりが集まって、「どうするんだよ、俺たち」みたいなことを誰からともなく話し合うわけです。70年代ですから、分厚い支援を朝鮮人ごときにしようなどという甘っちょろい日本社会ではなかったですから、新聞記者になろうとか、学校の先生になろうとか、そんな「夢物語」がぶつつぶされることは肌で分かっているわけです。そういうのを知っているから、どうするんだよ、と。どうするんだよ、と言った言い出しっぺは見事にヤクザになりました。そのようなところで選択肢として何があったか

というと、ヤクザかホスト、パチンコ屋、土木作業員、土建業、板金など。いわゆるホワイトカラーに当たるのは民族団体の職員か、民族学校の先生。その中で「偉く」なるのは、「勉強はできるけれども、頭の悪い（愚鈍な）やつら」という感じを私は持っていました。損得を度外視して地道にまじめに働いている人の中には本当に尊敬すべき人がいることは分かっていたのですが……。それとどういうわけか、弁護士、医者みたいな一発逆転作戦です。一発逆転というのはヤクザも一緒です。当初、私は天文学をやりたいかった。天文学といたら、「天文学?????」と言われて恐縮するような感じを持ったのですが、確かにそうだな、その当時の私らの「規範」からははずれているな、と感じたのを覚えています。

何が言いたいかというと、ニューカマーの外国人の子たちを見ていると、高校に入るけれども、ドロップアウトしてしまう子が多いです。ちょっとしたきっかけでフツと崖から落ちるような変化がドラスチックに展開されてしまうことがあります。そのようなブレ方はあのときの私たちと重なるものがあるように思うのです。生き方の選択肢が狭い……。いわば、ハンドルに遊びがない感じですか。何かの拍子に医者志望から突然ヤクザになる、というような……。私もそんな危ない経験をイッパイしました。だから、怪しいでしょう？　こういうことは自分で言っただけじゃない（笑）。

私は、もともとは小山さんが今いる「正しい」会社にいたのですが、若手の職員から怪しいオヤジだな、「何をしているの、本当は？」とよく言われていました。確かにこういう「怪しさ」の一端には、金芝河という、政治犯として死刑囚にもなった韓国の詩人が昔、文化の定義を問われたときに答えたように、ある「戦いの結果」と言えるものが横たわっているのかもしれませんが。私のこの身ぶりを「戦いの結果」になぞらえるのは、本当におこがましいことですが、しかし、そこには、70年代の在日コリアンのある種の中学生にとっての等身大のささやかな、そして粗野で不器用な「戦い」の軌跡がいくばくかは埋め込まれていると言えらると思います。そういうことを今日、すごく想起しました。

K君と接しているときも、そういうことを思い起こすことが多いです。今日思い起こしたことの延長線上にあるのは、「私がなぜここにいられるか」ということです。こんな人間がこんな壇上に……。これは高橋センター長の恩情だけではかなわないことです。私は中学、高校と本当に危ないことがイッパイありました。それこそ極端に道を踏みはずすような条件も整いかねないところにいましたが、今日ここにお集まりのような方々と同じように、例えば、学校の先生にこれ

でもかこれでもかというぐらいの、ほとんど蕩尽と言っていいほどのエネルギーを注がれました。それがなぜかは分かりません。何で私にそんなふうによくしてくださるのか。大学時代の恩師もそうでした。その理由が全く分かりませんでした。が、それによって、私は救われたように思うのです。もちろん、「在日コリアン」の生き方の典型としては、東大教授の姜尚中さんみたいなモデルとか、あなどれない焼き肉屋のオヤジさんとか、いろいろなふうに救ってくださった同胞の先輩がいました。が同時に多くの日本の方々にも本当に救われたと思っています。

「なぜ私がここにいるのか」というのは一言では言えませんが、そのことを考えながら、K君たちと何かをしたい、そんなふうは今、思っています。オールドカマーとニューカマーの連携とか連帯とか、それが外在的に語られるときなどは、「勝手に言うなよ」と思うことがあります。でも、結果として、そんなカテゴリーとは別に私はK君と似ているというより共鳴というか、共振する部分があります。これを後で抱負として語りたいと思います。以上です。

#### ◆ 自らの立場性を問われる実践研究

佐藤 今、お話にもあったような金さんとチームを組んでいます。金さんが最初に言ったように、私たちの班は2つ軸がありまして、当事者の立場をいろいろ描いていくということと、もうひとつは連携ということ。この連携という言葉はきれいですが、改めて当事者の視点から連携について考えてみるというのが必要だと思います。「ふれあい館」を中心にして、川崎の先生方、それから、総合教育研究センターや行政の力というものを借りないと変わっていかないのも事実ですが、やはり当事者の側からこの連携というものを考えていきたいということです。

そうすると、連携というときに、先ほど杉澤さんからもありましたが、ただ単に組織間の連携を語るだけでなく、当事者の側から、子どものために何をしていけるのかについて考えてみたいというのがねらいになります。

そして、さらにもうひとつは、先ほども言ったように地域の側からも考えてみたい。今日は面白い話があったと思います。先ほど金さんのお話にもありましたが、成長役割モデルということです。「ふれあい館」でやっている試みの中にその例が見られます。フィリピンにつながる高校生がいますが、鶴見総合高校に通っています。その子どもたちは支援してもらっていますが、逆に「ふれあい館」に来ている小学生、中学生を支援するというような関係が作られています。こう



した関係ができつつあることは素晴らしいことです。そういうものを見据えながら、どうやったらこの子どもたちをサポートしていけるか。それを具体的な地域の側から考えてみたいということです。

私はもともと学校や行政などと深くかかわってやってきたものですから、当事者の側からいろいろな形で突き付けられている課題があります。それをどうしたらいいのか、正直言って非常に難しいです。実は私自身もこの実践研究にかかわると、客観的に何か評論するだけではいけないんですね。自分の立場性を問われている。どうしたらいいか、私に何ができるのかということが出てきます。その辺のところキツイところでもあります。

また、大学も忙しくなっています。法人化後、大学はとても忙しくなっていますし、私自身、大学の中間管理職をしていて仕事が忙しく、現場に行くことがなかなかできませんでした。ようやくその仕事も終えて、少し本腰を入れてかかわってみたいなというようになりました。これからどうなっていくのか、先が見えませんが、東外大の協働実践研究というよりは、川崎の中で何が私たちにできるかというところに今、私どもの関心があります。09年の3月までに何ができるか分かりませんが、何とか形にしたいと思いますし、新しい出会いもあると思っています。

私自身はこういう研究を課題生成型研究と呼んでいますが、つまり、研究は仮説をつくったり、仮説を検証しますが、我々が今やろうとしていることは課題を共有して、その課題をどうやって解決していくのか。そこに実践研究そのものの方向性があるのではないかと思います。ですから、そういうことを少し自分自身の問題としてもとらえながら、そのためにいろいろな人とつながりを持たなければいけませんし、そんなところで今、どういう方法があるのかということを探しつつやっているというのが正直なところです。

杉澤 ありがとうございます。では、渡戸・関班、よろしくお願いいたします。

## ◆ 外国人相談をひとつの切り口に

関 私の方から先に。渡戸・関班は自治体の外国人政策と区域を超えた行政・市民連携の可能性というタイトルでやっております、場所としては東京都町田市と神奈川県相模原市をフィールドに選んでやっています。隣にいる親分肌の渡戸先生がリーダーシップを取っていろいろやってくださるので、私は本業がそもそも学者ではないものですから、何となくその後について、今のところやっているという状況です。

町田・相模原というのは実は個人的に言うと、自分の人生の中で全然かわりのなかった場所です。私は埼玉県出身ですが、とにかく町田市とか、相模原市とか、小田急線とか、横浜線とか、そういうのは関心もなかったし、ほとんどかわりもなかったところなので、逆に先入観なく客観的にこの地域を今、見えています。予想としては、隣だ



し、いくら県境を挟んでいるとはいっても、かなり似ているのではないかと思います。相当程度違っているということが中間的な感想です。

それから、もうひとつ感想として持っているのは、私たちはふだん、弁護士として法廷で何かを証拠によって証明するという仕事をしていて、例えば、裁判官が合理的な疑いを入れない程度の心証を持つような高い立証を求められるということがあります。そういうものとういう研究はずいぶん違うなというのが率直なところ。そこまで証明しなくてもいいというのはすごく気が楽でうれしいと思っています。何となく人から話を聞いて、後で反対証拠が出てくるのではないとか、そういう心配をしなくていいというのがすごくうれしく、作業をやっています。その辺が個人的な感想です。

「外国人相談」というのは渡戸・関班の中で私が担当しているテーマですが、実は外国人相談そのものの特殊性というものが、行政境界を超えた「協働・連携」というテーマと結構うまくリンクしていると思います。というのは、先ほど法律相談は弁護士にとって一番難しい仕事だと申し上げましたが、外国人相談はその中でも、第一に、そもそも通訳を入れるというところから始まって、ボランティアも含めて、多数の人と「協働」してやらないと相談自体ができないという特徴があります。そういう人材は不足しがちですから、必ずいろいろところが人材の共有をしていかないと運営できません。

第二に、外国の方の抱えている問題というのは、普通の法律問題だけではなくて、先ほど阿部先生が言われたような問題から典型的な入管の在留資格の問題まで、いろいろあります。単一の専門家では解決できない複雑な問題が多いために、専門家の「協働」が必然的に必要になってくる分野だという特徴があると思いま

す。

さらに第三には、そういうサービスというのは地域的にはかなり偏在をしているので、地域的な連携関係がもともと求められる分野だという特徴があります。そういう特徴を持つという点で、この協働実践研究というもののひとつの切り口として「外国人相談」というものを見ていくことは、かなり親和性があるというか、比較的必然性があると、今のところ感じております。

町田と相模原の外国人相談の比較に関しては午前中報告しましたし、午前中のレジュメにもいろいろ書いてあります（資料 p. 107 参照）。全体的なことは渡戸先生の方からご紹介いただければと思います。

### ◆ 各班の連携で新たな視点が

渡戸 私は親分肌ではないので、誤解なきようお願いいたします（笑）。私は自治体政策の研究から入って、市民活動の担い手や当事者たちのヒアリングなどでお付き合いさせていただいてきたのですが、今、財政的に国も厳しいですが、自治体も非常に厳しい状況にあります。その中で社会福祉、社会保障関係の費用がどんどん膨らみます。つい先だって、最低賃金法が変わったようですが、生活保護費の関係が今、問われています。

そういう状況の中で自治体政策を考えますと、多文化・多言語化に対する自治体の政策、対応というのは優先順位が必ずしも高くない。むしろ、低いところに位置づけられると思います。市政世論調査のような形で各自治体は数年に1回、市民の行政のアンケートをやっていますが、多言語や多文化に関する要望というのは非常に低いようです。

それでいいのだろうかということ、問題意識を持って頑張っておられる社会教育主事や国際係や市民課などの職員の方がいらっしやると思います。しかし、それがなかなか横につながっていきません。そこでむしろ、市民の側が自治体職員を鼓舞したり、巻き込んだりしながら動かしていくことがますます重要になっているのではないかと。下からの動きといいますか、「from below」という形で、いろいろな取り組みが提案されたり、実現されていくことが重要になっていると思います。

自治体の方もそういう市民の応援団ができれば、やりやすい。中にはトップダウンで上からの理念を掲げながら、すてきな施策を展開する首長さんもおられますが、市民からの支持や市民活動の広がりがないと、市長さんが変わると終わってしまうということになります。そういう意味で、地域というのは生ものであつ

て、短期的な見方だけではなくて、中長期的な見方を一方でしなければいけないと思います。

今回、町田、相模原となった理由のひとつは、関さんとは全く逆に、私に土地勘があったからです。町田は73年に「23万人の個展」というイベントがあったところから行っているところです。最近は団地の高齢化や空洞化などが進み、町田市は『団地白書21』を出しましたが、実は30年くらい前に1回目の『団地白書』を出しています。当時は子どもの急増ということで若いご夫婦とその子どもが急増したときに自治体財政が追い付かないということで、白書が出されました。それが今度、30年後に全く違う形で『団地白書』が出たということです。

一方、相模原も私は20年ぐらい前に初代の市政調査専門員をやったことがあります。相模原を2年間調査しました。そういう意味で、20年後の相模原という関心もありました。そういうことで、私は単に懐かしむというよりも、今どうなったのかという関心で観察をしています。

このように、地域は中長期的な見通しで評価なり、認識していかなければいけないと思いますが、同時に緊急の課題や即応しなければいけない課題も常にあります。その意味では、例えば、「佐藤・金班」から出されたように、外国出身あるいは外国系の子どもたちの問題にしても、彼らは大人になるまで待てません。「ロールモデル」を提示できない中で何かをしなければいけないという、まさに先ほどの課題生成型研究が問われます。これは一口に外国人政策との話ではなくて、個々の分野で本当に迫られている課題がたくさんあるということだと思います。

そういった課題群を解決するときに、市民と行政をつなぐ中間支援組織（インターメディアリー）として、国際交流協会、国際交流プラザ、ラウンジなどがあります。ここにおけるコーディネーターの役割が非常に大事ですが、そのコーディネーターの役割については、「山西・小山班」で検討しています。こうして、互いの観点やリソースをやりとりしながら進めているのがこの協働実践研究プログラムの面白いところで、大事な点でもあります。私もそういう意味で、このプログラムの中で連携し、また地域ともうまい形で連携協働して、新しいものがひとつでも生まれればという願いでやっています。

#### ◆ 日常の活動の中での自分研究対象に

大木 僕の中で研究とか実践とか、協働という言葉は僕は使わない言葉なので使いませんが、日常的なものとしてずっとあるものです。例えば、おとといも午前

中はパキスタンの人と品川の入管に行き、午後は弁護士会で課題を同じくする人たち、国際人権委員会の部会というところで会議があり、その会議中に電話で呼び出されて、急いでまた通訳さん呼んで、留置場に中国の人の接見に行きました。この前の土曜日は地元の武蔵野市の国際交流協会のお祭りに取りあえず顔を出しに行き、再来週の土曜日は八王子の研修でお話をするようになっていきます。というような日常のことをやっておりまして、さらに言えば、その日常の中での「僕」を研究の対象にしようというのが僕の発想です。



30年ぐらい前からの僕の愛読書ですが、本を1冊、昨日、今日で読んできました。高橋和巳さんの『邪宗門』という小説ですが、これだけで分かる人、分からない人でだいたい年代が分かれると思います。僕は分かる人の一番下ぐらいだと思います。この本を僕は高校生のときに読んで、このときからある決意をしました。僕は組織者にも指導者にもならず、ただ批判者であろうと。この場でも僕の役割はそういう役割だと思っています。先ほど杉澤さんがおっしゃられた研究と現場との乖離を埋めていくにはどうするか。先ほど申し上げた通り、国際政治の出身なので、僕はもともと産学協同にはとても警戒心が強いのです。失敗するとそれはすぐく狭い現世御利益の世界になってしまいます。そうならないようにするのに僕がどうかかわれるかというのが、たぶんこのグループの中での、ある種、自分が決めた役割なのかなという気がします。

今、実は協働実践うんぬんとは別ですが、少し孤独な作業を前提作業としてやっています。そういうわけで、僕はかなり古くから市民ボランティアと一緒に相談会をやるようなかかわりになったので、市民の皆さんに向けて、いろいろなお話をさせていただく機会が多かったのです。その時々準備してきた断片をひとつひとつまとめるという作業を今、ポツポツと1人でやっています。ただ、もともと僕の話は法律的な知識の話が主ではないのですが、知識というよりネタの羅列をしてもつまらないので、そこから何かに発展していけるような、もう少し深いところから何でそうなっているのか。あるいはそれについて、どういう批判がある

のかまとめつつ考えています。そうやって「ネタ」として消費される前提で、ときどきに集めた断片を加工し直しながら、つなぎ合わせています。例えば、日本の国際私法、現在では法の適用に関する通則法という法律ですが、日本人と外国人のカップルの離婚については、夫婦の本国が同一であれば、共通本国法。長く住んでいる住まいが同じ場所であれば、共通の住んでいるところの法。どちらでもなければ最密接関連地法が適用されることになっています。ただし、夫婦の一方が日本に住所を有する日本人であれば、そのときには日本法ということで、夫婦の一方が日本人の場合は離婚について特別扱いがあります。

これは僕たちにはとても便利です。外国法を調べないで済みますから。僕たちが知っている日本の民法で離婚を扱えるから、とても便利です。でも、変です。それはある種の不公平な取り扱いですから。いろいろ理由を調べてみる。そうすると、これは日本で離婚を成立させるなら、夫婦の一方が外国人でも、要するに離婚届を役所にする、戸籍の届け出をするということです。そうすると、日本で離婚する場合には、片方が日本人なら戸籍の届け出もしないとその効果を認めないという、戸籍制度の問題にいく。例えば、そんなことが分かってくると、戸籍制度に対する批判との接点ができ、国籍という視点とジェンダーの視点がつながってくるのではないかと思います。

そういう観点で今まで話してきたことをベースにしながら、それをもう少し批判的に深めていくような形でのまとめというものをポチポチやっています。もしかするとそれだけで終わるかもしれませんが、そういうところからいろいろところで市民の皆さんとの議論を深めていきたい。問題意識を共有していきたいということを考えています。

## ◆ 領域を超えた連携の必要性

阿部 私は皆さんと違ったことをしゃべろうという気になってきました。というのは、金さんのお話を聞いていて、私は毎日、金さんのような話を朝から晩まで聞いているんだと思いつつ、1週間、1年間、ずっと実践ばかりをやっていて、あまりエビデンスのあるようなことをやってこなかったのではないかと急に思い始めました。そういう意味では、きっと皆様方と近い実践です。あくまでも僕は患者さんを診て、患者さんをどう支援するか。具体的にどうするかということをやってきたのだと思います。

いろいろところで私は外国人の心の問題や外国人の子どもの心の問題を話してください、あるいは、通訳のときの外国人への対応の仕方について話してくだ

さいなどと講演をお願いされますが、私が話すことは実践の中で得たもの、ほとんどそれが土台です。その中から、こうやったらどうでしょうかとか、こういう考えがありますというようなこと、あるいは、それに少し文献をつけたぐらいということによってやってきたと思います。そうではなくて、もう一度、日系人がいる地域に戻って、実際にインタビューする。今回は07年の8月下旬から9月下旬にかけて7～8人の我々のグループが、上田市在住のブラジル人15家族にインタビューしましたが、そこから学問的なアプローチで、どういう支援ができるのかというようなことを出していかないと、きっとここにいる先生方は相手にしてくれないだろうと思い、少しまじめにエビデンスのある研究支援を考えました。

その結果を一部ご紹介します。

まず、日本への移住の経緯ですが、経済的な理由、そして親族が先に住んでいるとか、日本への親和性の高さが挙げられます。それから、日本での生活で良かったこと、困った経験を聞いたところ、教育の質が良いことやサポートしてくれるさまざまな体制があるなどの評価の一方で、言語・習慣の困難さがあることや子どもの様

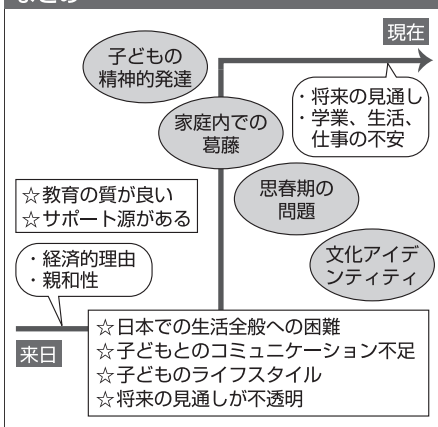
### 移住に伴うところの問題

- ・ホームランドでのストレス
- ・移住先での受け入れ環境
- ・言語文化的孤立
- ・社会・経済的地位の低下と職場葛藤
- ・家族との離別と新しい家族内の葛藤
- ・文化・民族同一性の揺らぎ
- ・身体的健康
- ・思春期、老齢期
- ・将来に対する未決定と不安
- ・新たなコミュニティへの参加

### 第二世代の子どもたちのところの支援

- ・言語文化的支援はあらゆる領域に関連  
→発達障害の査定
- ・新しい家族内の葛藤、接触の少なさ  
→親子のコミュニケーション不足から来る行動の問題
- ・思春期問題  
→自我アイデンティティ、学校不適応、非行
- ・将来に対する未決定と不安  
→文化・民族同一性の揺らぎ、形成 (e.g.ディアスポラ・アイデンティティ)

### まとめ



子、アイデンティティーの問題、教育の問題、あるいは差別、偏見とさまざまなことが分かってきました。

この中で、日系人の大人たちに対しては一応、私なりの研究を出していますが、今回は第二世代の子どもたちにいったいどういう支援と連携ができるのかということはこの研究の中から取り上げたわけです。「移住に伴うこころの問題」としてまとめてみました。これは移住に伴って、どういうことがリスクファクターになるかということで、言語文化的孤立、将来に対する未決定と不安など10のファクターが並んでいます（前ページ右上表参照）。

これで4つのことが私の中でまとまってきました（同中・下表参照）。ひとつは、「言語・文化的支援」というのはあらゆる領域に関係しているけれども、発達障害や自閉性障害というのは言語の問題があります。例えば、言語でうまくしゃべれないのは、自閉性障害という病気によるものなのか、あるいは、バイリンガルな状況の中で起きてくる混乱によるものなのかによります。2番目の「新しい家族内の葛藤、接触の少なさ」。こういうものからいろいろな問題行動が起きてきます。それをどうするか。それから、「思春期の問題」です。これはもちろん日本人にもありますが、外国人なりのハンディを負うことによって、学校不適應とか非行という問題が出てきます。そして4番目に「将来に対する未決定」。これは非常に大きいと思います。文化、アイデンティティー、同一性の揺らぎ。こういうことをやろうと思いますが、これは決して精神医学やその近接領域だけではこういう問題はできません。いろいろな教育、政策や労働の問題もありますし、お父さん、お母さんが仕事をしているとか、いろいろなことが関係していますので、その辺を連携しながら心の問題の研究ができればうれしいという感じです。

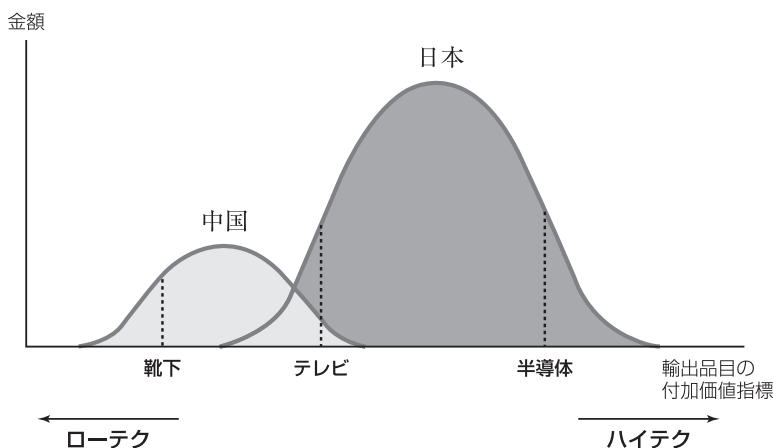


#### ◆ 具体的なプログラムの提案を

井上 私の場合は経済というものを冷静に客観的に見なければいけないというのが、まずベースになっています。私も昨日の分科会の中で説明できなかったの



## ■ 高付加価値分野にシフトする産業構造



(出典) 2002年6月「中国の台頭とIT革命の進行で雁行形態は崩れたか—米国市場における中国製品の競争力の検証—」(独立行政法人 経済産業研究所上席研究員 関志雄氏)

ですが、企業というのは今、どんな立場にあるかというのを2つの資料でご説明します。

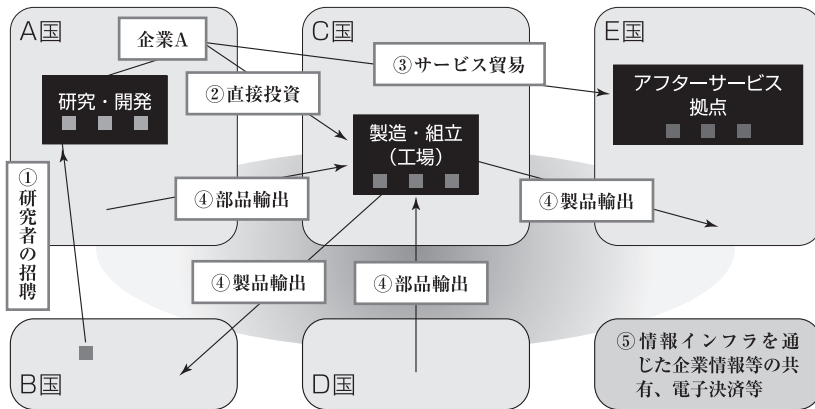
上の図は私自身が書いたことではありませんが、関志雄さんという中国出身の研究者で、日本で活躍されている方です。中国の山、日本の山というのがあります。縦軸が金額で、横軸が輸出品目の付加価値指標であります。昨日もアルミ鑄造の企業の総務課長さんに来ていただきまして、いかに彼ら在必死になって高付加価値化を図り、中国に追い上げられないようにしようとしているかというのがよく分かりましたが、要するに、日本は中国と比べると、かなり大きな山の高付加価値の製品を持っています。これらを生産して、輸出している。中国は靴下と書いてあるのはやや極端ですが、我々が今、着ているようなもののかかりはメード・イン・チャイナですから、中国で作って、我々がそれらを買っているわけです。

ただ、中国はこれからもそのようなものばかり作っているつもりは全然ないのですね。日本が作っているようなものを作って、追い上げていきたい。そうすると、人口は10倍だし、優秀な人間も10倍いるわけだから、ドンドン日本を追い上げて、覆いかぶさっていきこうとします。そうすると図の右側の方に中国の山がシフトしていくのです。ハイテク化をしないとイケない。その中で中国企業はど

ういう形で国内に生産基盤をつくるかというのが大きなポイントとなります。そこには人材というものと技術というものと資本というものの3つが必要です。どちらかという、日本は人材でやってきたといわれていますが、実は労働力の数でやってきたというよりも、その人々の工夫や創造など、そういうものでこの山をドンドン右に持ってきたということです。

それに今、阿部先生がお話になった第二世代の問題。第二世代に対する支援を行う。彼らに何とかこの日本の高付加価値化の取り組みの中に参画してもらいたいという気持ちがあります。日系の人たちにアンケートを取れば、みんな経済的な理由で日本に来ています。日本の方が給料はいいし、日本の方が働きやすいのではないかと来ています。中国に追いつけられながら、日本の企業はいろいろ人事戦略を巡らせています。ある

### ■ 複雑化する分業体制



### 東アジア自由経済圏が実現すれば…

- ① ヒトの移動の自由 (例：技術者・専門家が円滑に移動)
- ② カネの移動の自由 (例：透明かつ自由に直接投資が可能)
- ③ サービスの移動の自由 (例：業務上の拠点の設置が自由に)
- ④ モノの移動の自由 (例：統一規格に基づき、円滑な通関により、無関税で輸出入)
- ⑤ 情報の流通の自由 (例：生産要素の移動を円滑にする情報の共有、安全な電子決済)

(出典) 日本経団連事務局にて作成

いはコスト削減をしているという中に日系人が入ってきています。企業の人たちは少子化の中で、日本の若者だけではなく、今、外国籍あるいは外国につながっている子どもたちを自分たちも協力して育て上げて、自分たちの企業活動にも入ってきてもらって、創造的な活動をしてもらいたい。要するに、作業員ではなくて、技能あるいは技術といった分野に入ってきてほしいという気持ちがあることだけはお話ししておかなければいけないと思います。

現実には上田市に入ってインタビューした10社ほどの中で、明らかに日本国内の生産の方向が変わりつつあるということが分かってきました。重厚長大産業よりも、むしろ、精密機械や組立加工、あるいは素形材関係などの高付加価値産業ほどその傾向が非常に強くて、そこに外国の人たちにどういう形でその生産活動に参画をしてもらうかというのが大きなテーマとなっています。

最後にもうひとつ資料を見ていただきたいと思います（左図参照）。これは非常に複雑ですが、要するに、日本をA国とし、研究開発とか、設計とか、そういった分野の中心になっていく。一方、C国は中国ですが、製造、組立、加工という比較的流れ作業的なラインを持つ工場を日本企業が中国国内に移し、生産をしていく。そうすると、阿部先生が先ほどお話しされていた問題で、家族の仕事が不安定になることで子どもたちに心の問題が出てくる恐れがあります。従って、日本国内では、高付加価値製品の生産、あるいは設計、開発といった分野にドン・ドン外国人の皆さんにも参画してもらいたいということでもあります。日系人が今まで働いていたラインが日本国内から次々なくなってしまう。それによって日系人家族の生活が非常に不安定になって、子どもにも影響が出てくるということだけは間違いなく今後も続いていくのではないかという感じはします。

先ほど申し上げましたが、心の問題を扱う阿部先生と市場のメカニズムを分析している私とそれからもう1人、労働や社会制度を研究テーマにしているウラノさん、この三者で、複雑ではありますが、方程式を解いて、必要な政策を出して、あるいは実際のプログラムを作って、上田市にぜひ提案をしたいと思っています。

## ◆ 次世代の子どもたちのために

野山 野山班では、先ほど申し上げたように日本語プログラム、地域の特性を生かした日本語プログラム作りを追究していっています。先ほど金さんが、自分が生まれてきてからこれまでのことについて、話してくれました。そこで私も私自身がどうして、日本語教育に興味を持ち始めて、日本語教育の世界に足を踏み入れたかという話を少ししたいと思います。その問題と、今かかわっていることと

非常に関係があるからです。

私は長崎県の西の端の五島列島という島で生まれたのです。五島列島は、皆さんご存じのようにクリスチャンがたくさんいた、隠れキリシタンの島という地域です。今のローマ・カトリックとは違った意味で、自分たちは自分たちのカトリックを信じているというような人たちが大勢いるような世界です。私が生まれた奈良尾という町は、海岸側は仏教徒で浄土真宗と禅宗の人がほとんどで、その反対の山の後ろ側の方にはクリスチャンが住んでいました。小さいころから、「山の向こうに行っちゃいけないよ」と親や他の大人に言われていました。小さいころはそう言っている意味がよく分からなかったのです。

中学生になると、その山の向こうの子どもと海岸側の子どもが初めて一緒になりました。実は少なからず怖いと思っていました、自分たちの心の中では。でも何も無いというか、何も起きませんでした。小学校の通過儀礼としては、4年生ぐらいで例えば、サイクリング車を買ってもらって、山の向こうに坂道を乗り越えてひそかに冒険に行くのです。何もなかったよ、とか言いながら帰ってくるわけです。ただ教会があったということと、毎週日曜日にどうも教会に行っているらしい、あそこの人たちは、というようなことを言っていました。我々は普通、毎年花祭りのときにはお寺にお参りをしてお菓子をもらったりするということをしているわけですが、彼らは毎週日曜日に教会に行くらしいということを知るわけです。

そうこうしているうちに、高校に入る時期が来ます。大半は大学に行くこともなく高校を卒業して働くことになります。大学に進学したい者は、なぜか故郷を飛び出て進学校に越境入学していくというような運命をたどっていきます。子どもがどこで生まれてどこで育つかということによる地域格差というか教育の平等・不平等という問題を考えざるを得ない地域に育ったというわけです。長い間ずっと私はあそこで生まれたことを非常に恨んでいましたし、不愉快な気持ちでいました。どうしてこんなところで私を産んでくれたんだろう、親は、と。金さんとは違う思いですけども、何で私が例えば大阪や東京などの都会に生まれずに、当時の大都会の便利さなどから10年も20年も遅れたようなこんな社会に生まれたのだらうというような、不平等さを感じていたのです。

ところが、そのことが10年、20年たって成長していき、自分の天命を知るようになるにつれ、ありがたいと思えるようになっていったのです。これはなぜそうなったかというのは長くなるので全部は話しませんが、10代の終わりにたまたま町の歴史書と出会ったことが転換点になったように思います。これは、当時

進路問題で大げんかをしてオヤジとは口をきかない生活が2年半続いていたのですが、そのような状況の中で突然、オヤジが本を持ってきて、「お前、読め」と言ったのです。その理由は特に言わなかった。だいたい父親との会話ってそんなことが多くて、理由も言わず何か渡されたり、殴られたりとかということがあるわけです。渡されて読み



始めて気がついたことは、その歴史書の最後のあたりにクリスチャンと仏教徒の葛藤に関する奈良尾の歴史のことが書かれてあって、そこで野山家の先祖のことに触れていました。先祖は仏教徒側、つまり行政側というわけですが、クリスチャン側の人間たちを、罰する側にいたのです。島から例えばどこかに流してしまうとか、あるいは場合によってはたぶん、死傷させるというようなことがあったのでしょ。この歴史家は、調べた限りではこういうことをやった野山家の人にならなくなつはないと、そういうふうなことが書かれていたわけです。

それを読んだときに何を思ったかということ、私のアイデンティティーが傷つけられたというかショックを受け、不愉快そのものだった。でもどうしていいかわからない。エネルギーだけはいっぱいある。オヤジはきっと、もうこの先自分の人生をどうこうはできないから、お前に託すということを言いたかったに違いないと後で思いました。そのときは訳がわからないし、エネルギーが余っているからとにかく何かをしようと思いました。それで、その本を手に入れることは絶版なのでできないし、コピーも1枚50円、100円の時代で高過ぎてできない。しょうがないから全部写そうと思って、高校3年生の夏休みから3カ月ぐらいかけて300ページ以上のものを写していったわけです。そのときのエネルギーの根源にあるものが、私が現在、多文化にかかわることになっているエネルギー源だろうと考えています。

昨日、今日といろいろな分科会でミッションの話、使命の話が出てきているわけですが、自分の生まれた場所、それから産んでくれた両親、それから周りにいた人々について非常に深く考える環境に、国が違って、民族が違って、考えるチャンスはみんなあるのだということです。ですが、それをどんなふうにか

ていくかというプロセスがとても大切で、その道筋をつけていくためには、試行錯誤しながら恐らくいろいろな人間の力を借りなくてはいけないということが、後になって私は分かったわけです。

当時の私の周りにはそういうことを分かっているモデルもいなければ、誰も説明をしてくれないという状況でした。ましてや高校生で、学校の先生は全くそういうことについて、何、言っているのだ、お前、という感じでした。進路のことだけを考えて、我々が通っている高校から大学に入ればいいんだということを言うだけのような状況でした。それっていったい何なんだ、この学校は、と思いながら、教育制度に対する大きな不満が積もりました。学校の先生がとても忙しいということは、後になって分かって同情もしましたが、ただ当時の対応ぶりは何なんだという気持ちはいまだにあります。恐らく似たような感情を海外から来た子どもたちはもちろん、日本の子どもたちも持っているはずです。

そうだとした場合、次代を支えてくれる子どもたちにいったい、我々は何ができるのかということを考え始めたのが20代から30代だったのです。そのときに出会ったのが、たまたま私はスウェーデンという国だったのです。スウェーデンの移民に対する政策の背景に、三大基本方針があって、平等と、選択の自由、そして協調（コーポレーション）という言葉からできていますが、この3つの基本にとってもひかれました。

特に選択の自由。この選択の自由を何がしかの形で次世代に与えられるような社会をどうつくっていくかということにかかわっていきたいというふうに20代の終わりに思いました。そして、これから自分ができることは言語の世界で何かやることで、教育や政策にもかかわることでした。それで子どものことからやり始めたというのが私の実情だったわけです。

ハッキリ言うと、この研究班グループ全部の内容に興味があります。でも私は今、プロパーとしては日本語教育の分野にいますので、ここをやるのが本業ということです。センターの伊東祐郎先生に協力をいただきながら、日本語のプログラムのことをやっているわけですが、でもいつも考えているのはこうした基本的な教育や政策のことです。

日本で今、日本語のプログラムを考えようとしたときに、外国人在住者の父子認定という問題はあまり議論されません。永住権か帰国、あるいは帰化かという選択になっていて、ねじれた状況の中で永住権が取れたり帰化されたりということがあります。どの資格の人にどういう日本語教育プログラムを提示できるのかということを前提に考えると、入管の政策の変革はとても日本語教育の世界に影

響を与えます。日本語教育の目標を考えるとときに、この政策展開がない限りは実は家族制度の中で言えば子どもが救われないという状況があって、とても大きな問題だと思えます。

午後に発表会がたくさんあったわけですが、とてもいいなと思うのは、ただ研究に終わらせずにすくい上げて行って、話したことが基本的に文字化されて本になって提供され流通していく。それはそれでとても大切なことで、それらを見たり読んだりした人が、あるいは興味をもった人がいて、この場に来てくださるということが今後繰り返されていく中で、短期間の間に何かすごく大きな波が起きて、最適な方向に向けて何らかの転換が日本にもなされればいいな、という気がしています。

### ◆ まず「思い」から始めたい

小山 かつての同僚の金迅野から、正しい財団と呼ばれて非常に僕はショックでした。彼がたぶん言いたかったのは、誰にとっても正しいのかという問いを突き付けたのだと思えます。最近、政策研究というのが研究者の間でも流行になっています。僕自身も行政といろいろ対峙していく中で、数値化とか、官僚にとって分かりやすいロジックで政策提言をしなければならない環境に、かなりの部分を置いてあります。今日は少しその反省の弁を述べたいと思えます。

今、僕の勤務先財団では、多文化ソーシャルワーカーの養成プログラムを作るにあたって、その予備調査として、神奈川県内のいろいろな方にインタビューを始めています。昨日話をうかがった方は、日系のペルー人の女性でした。その方から、ふだん相談をやっている中で出会ったペルーの方と、日本語と一緒に勉強する小さな場というものをつくり始めた、という話を聞きました。これは僕の反省でもあるのですが、外国人住民への情報提供の在り方を考えるとき、いかに効率的に情報を伝えるかという部分に関心が集中してしまい、どういう場で言葉や情報が伝わるのかという肝心なところが忘れられている気がするのです。

昨日、彼女から話を聞いた中にこんな言葉があったのです。

「小山さん、情報とか言葉というのはぬくもりのある人間関係の中からしか伝わらないんですよ」

この言葉を聞いたときに、雷に打たれたような気がしました。こんな僕でも、パウロ・フレイレが『伝達か対話か』などで述べている「世界認識の方法としての識字教育の意味」みたいなことは、知識としては知っているわけですが、いつの間にか、僕の体は、自分の実感よりも理屈でモノを考えようとする身体になっ

ていたのです。

何が言いたいかという、今、政府だけでなく学問の世界も、政策とか制度・仕組みづくりという政策重視の傾向がありますが、最も大切なことは、人々の「声」を聴くこと。人々の声を一回身体化して、その中からまず始めてみるということが、重要ではないかと思うのです。

僕は、今日の午後に、「自治体と国際交流協会の役割」という内容のグループ発表に出ていたのですが、そこで非常に触発されたのが浜松国際交流協会の堀永乃さんでした。彼女は日本語コーディネーターという肩書で、企業の中に入り、担当者と粘り強く対話をしながら企業内で日本語教室という場をつくり上げてゆく実践について報告をしてくれました。

これは僕の勝手な憶測ですが、おそらく堀さんの頭の中には、政策づくりという意識はあまりなくて、まず自分の「思い」があり、その「思い」を語っていく中で、結果として日本語教室という場が出来上がってゆく。こういう場の在り方が、ものすごく重要ではないかと思いました。

協働実践研究会をやっていく中で、どうしてもカリキュラムを作ろうみたいな話ばかりになるのです。だけど、大事なものは、浜松の実践のような場をつくっていくことではないかと思います。そういう意味では、山西さんと一緒に観察した立命館大学大学院のユースワーカーの養成の授業は、大変参考になりました。このコースの中心は、理論研究ではないのです。学生さんが京都市にある8つの青少年活動センターのひとつに入って、インターンを半年ぐらいやります。そのインターン経験を実践記録として残し、その記録をもとに、授業の中で個々の院生の実践を振り返るという作業を、ものすごく丁寧にやっていました。

外大でこれから人材養成カリキュラムを作ること自体は否定しないのですが、恐らく、立命館大学のように丁寧に場をつくっていく、あるいは、政策よりも、まず「思い」から事業をスタートさせるということが重要ではないかと思いました。

## ◆ 教育と文化について考える

山西 この実践研究会は言い出した者が勝ちというか、個々の発言からコトが動いていきますから、ちょっとタイミングを逸するとなかなか自分の話に持っていけないところが正直言っているのですが、今、小山さんが「その場」ということをおっしゃったので、それを受けて少し話そうかと思っています。

確かに、私たちの分科会は、多文化に見るプログラムコーディネーター、ソー



シャルワーカーの専門性、さらにはそのプログラム作りをテーマに、具体的なプログラム作りは次年度から少しずつ形を取っていくというふうな流れを作っていますが、今、小山さんがおっしゃったようにまさしくそこで何をどう教えるかということよりは、やはり集まった人たちがどういうふうなダイナミズムを持って、「その場」をつくり



出していくのかという点、さらにそこに参加する学習者だけではなくて他のいろいろな現場の人たちとどういう関係をそこでつくり出していくのかという点が、基本になっていくんだろうというイメージは持っています。ただ、そこで私自身教育に携わっている立場からすると、そういうプロセスで生み出される教育はどういう質なんだろうということが、常に問い直しておきたいひとつのテーマという視点です。

いろいろなところで今、いろいろな教育が生み出されつつあります。ただ、多くの教育が非常に上滑りしているし、自分たちの生活もしくは生活課題というところとなかなかつながってこない。本来、人間というのは生活課題の中でいろいろな学びをつくり出していくわけですが、そこから生み出される学びと働きかけとしての教育が十分に連動していない。学校教育をイメージするとそれが非常に具体的に見えてくるわけですが、生活と学び、そして教育との関係が切れている状態です。その状態を崩したいという思いもあってずっと私も NGO 活動をしてきているわけです。

ですから、社会にあるいろいろな教育観の中に、ある種のダイナミズムをどうつくり出していくのか。ひとつの教育に収斂させるつもりではなくて、いろいろな教育が互いにおつかり合いながら、それぞれがどういう関係をつくっていくのか、またそのプロセスの中にどのような新しい教育が生み出されていくのかという点に面白さがあると思っています。時にはいい意味で対立をつくり、特にオータナティブな教育をつくり、教育の中にある種のスキ間をつくり出すことは、教育そして、社会全体が動き出す大きなエネルギーになっていくだろうという見方をしています。ですからこういう協働実践の中でも、そういったある種のスキ間

を生み出すような教育を、教育の中にどう楔として組み入れていけるのかということイメージしています。

ついでにそれとの関連で言うと、多文化社会という中で、これは昨日の私の分科会でも少しお話ししたのですが、ダイナミックなプロセスの中で私たちはどんな文化をつくり出そうとしているのかということが、やはりもうひとつ大きなテーマかな、と思っています。人間が歴史的にぶつかり合いながら、先ほど金さんは、「戦いの結果としての文化」というような言い方をされましたけれども、まさしく私たちはそういった中でいろいろな文化をつくり出してきました。また現在もそういう文化をつくるプロセスにある中で、また多文化化に応じた課題に対応しながら、どういう文化をつくり出していこうとしているのか。その文化というのは多文化という中で共生につながるような方向性を持っているのか、もしくは社会が少しでも平和な状態になるような方向性でその文化は機能しようとしているのか。私はその点を、数年というスパンではなくて、20年、30年、そして100年といったスパンで、見ていきたいと思っています。そういうことに向けての動きがつくり出せるような協働実践であり、そのための場づくりになっていたらいいと思います。

**杉澤** ありがとうございます。一人一人のお話の中でもっと聞きたいという気持ちになられたと思うんですけども、この続きはぜひまた来年度のプレフォーラム、全国フォーラムにお越しいただいて、議論を重ねていただければと思います。時間が限られていますけれども、会場から1人、2人、何かご質問、コメントがありましたらうかがいたいと思います。

**質問者** 名城大学の近藤敦といいます。最近、外国人政策とか外国人という言葉がタイトルから消え、外国とつながる子どもたちという形での表現が増えています。外国人相談といってもそこでは日本国籍を持っている人がいるでしょうし、子どもの場合は国際結婚で生まれる子どもなど日本国籍を持っているケースもあるわけです。外国人政策というような表現をしばらく使わなければいけないんでしょうが、それに代わる言葉を使っていく必要があると思っています。例えばいくつかのところは、外国人市民、外国人県民というふうに外国人を広げた使い方をしていますが、たぶん、日本語の使い方としてはかなり間違っていると思いますが、しばらくはそういう使い方をしなければいけないかと思います。いろいろなところで移民という言葉をよく使うようになってきていて、移民政策という言葉も使われるようになっていますが、それが政策用語に使われるのとは別に新たな言葉をつくる必要があると思っています。例えば私がコメンテーターをしたと

きは、非正規滞在者という言葉をなるべく使うようにしていました。例えば仏国は「サン・パピエ (san papier=滞在許可証を持たない者、非正規滞在者)」という言葉が一般のマスコミで使われ、不法という言葉の用語をできるだけ使わないようにするようになってきています。そこで必要なことは、そういう概念というものを研究者が話し合うと同時に、現場でそれがどういう意味合いを持つのかとか、現場でどういうふうに伝えるのとかを考えることが必要です。例えば「多文化共生」のように現場の方で広がった言葉を総務省が政策用語として使うということもあるわけです。そういう流れから移民政策学会というものができれば、関係する方は参加していただければと思います。

### ◆ 今後の研究の展望は

**杉澤** 移民政策学会というのが立ち上がるということですが、今の概念定義のお話もまた今後の議論のテーマとして考えさせていただきたいと思います。この全体会のセッションは、次の年の出発点でもございます。最後にお1人ずつ、ホンの一言ずつで申し訳ありませんが、抱負もしくは協働実践研究のダイナミズムがこう動くみたいなどころがありましたらお願いします。

**佐藤** 金さんとやっていることがもうひとつあります。当事者性ということをお話です。実は母親に介護付きの施設と思ったのですが、本人は嫌だと言っています。というのは結局当事者、母親自身の思いを無視し、こちら側の勝手な支援をしてしまったのではないかという反省があります。それを考えていくときに、まさに当事者性の視点からの連携の在り方というものを、ぜひこれから考えていきたいと思っています。

**金** 役割期待にだけ応えようなんて毛頭思っていないので、構造をしっかり見極めて、その構造の中で分かったことを分析して、課題を抽出して、解決に向かうという「スッキリ、くっきり」なスキームは一方で大事だと思います。しかし、もう一方で「スッキリ、くっきり」路線に昆虫採集の標本みたいにカテゴライズされないような生き方がたぶん芸者の筋なので、そういうことを実践の中で体現するということが大事なと、思っています。カテゴリーからこぼれ落ちてしまう「存在の地の部分」に敏感でありたい。これは日本人にとってもとても大事なことだと思います。国民なんて言われて「ヤッター」と、ニコッとかする存在って気味が悪いじゃないですか。カテゴリーからこぼれ落ちたものの連なりから、何か構造を新しくつくるというような働きをK君なんかとできればいいなと思っています。

08年、「ふれあい館」は20周年を迎えます。20年という数字に何の意味もないですけども、かこつけて何かできればいい。K君なんかと一緒に絡んで表現をする、「文化」をつくる、ということをやってみたいと思います。学習サポートと言うと「あいうえお」ばかりやっているように感じられるかもしれませんが、あるいは、「人材育成」なんて思われるかもしれませんが、そうじゃない目に見えないプログラムを作っていきたいと思っています。それは、その過程で、僕自身も練り直される「異形」の人づくりです。

**渡戸** 先ほどの私の話の続きで言うと、昨日、今日、たぶん自治体の職員の方の参加が少ないのではないかと思います。これは非常に残念なことで、もし来年度のフォーラムを工夫できるのであれば、自治体の職員がもう少し参加できるようなプログラムを工夫していきたいと思っています。それからもうひとつは、先ほど近藤さんの方から出た「移民政策学会」というのは、まだ立ち上がっていないんですが、08年春ぐらいをメドに立ち上げようと思っています、すでにホームページはできましたので、アクセスしていただければ見ることができます。

**関** 近藤先生の方から「外国人相談」「外国人とは」という話が出てきました。これは本質的な問題です。どうしても相談の内容が入管問題とかになると「国籍」という意味での「外国人相談」とならざるを得ないし、他方、相談における多言



語対応、つまり通訳の用意という意味合いになると、これは国籍の問題じゃなくて「民族」とか「言語」の問題という意味での「外国人相談」ということになりますから、実は意味はいろいろあると考えています。「外国人相談」というタイトルで相談運営をやっているけど、いったいどういう体制でどういうサービスを提供したらいいのかというのは、まさに検討し続けている問題です。その答えもぜひ、相模原・町田地域でのいろいろな実践の中で見つけていきたいと思っています。

**大木** 次年度に向けた抱負ということでもなく、いつも変わらぬ僕の抱負ということで。僕は、先ほど申し上げた通り三鷹というところで1人で事務所を開業している純粹自営業の弁護士であって、僕にとって外国人というのはお客様であって、地域の市民というのもお客様であって、にもかかわらずこの外国人にも地域の市民の皆さんにも僕は実質的には食わせてもらっていないというのが大問題です。この課題をどうやって解決するかというのが毎年の問題。そうでない限り自営業者である僕にとっては地域との連携や外国人との協働ができたとはとても言えないわけですから。

そのために例えば、こういうところでお話することが何の役に立つかという、何の役にも立たない、営業にならないのはこの10年ぐらいかけて分かってきましたので、実は今、もうひとつ書いているものがあります。「国際交流協会殺人事件」という小説のプロットを書き始めました。僕、業界内で自分が言う意味は、そんなないとも思っているし、もともとの対象が狭いと僕の営業ツールにもならないから、一般人向けといいますが、全然関心のない人たちに読んでもらうものを何か書けないかと、それには、僕の趣味でもあるんですがミステリーがいいのかなと。こんなところを、もしできたらものにしたいと現在思っております。

**阿部** 大木さんや金さんがいてくれるので助かります（笑）。先ほど少し話しましたが、何しろ上田市を我々としてはモデル地区として、あまり大きくないですよ、浜松とか、大泉・太田地区とかと違って。小規模で、何か具体的なことが実践できるのではないかといいふなことを思っていますので、ぜひ上田へ通ってやりたい。その中で教育ですとか教材ですとか、コーディネーターもいらっしやいますけれども、そういうふうなところからある程度の心の問題に少しずつ少しずつ踏み込んでいただけるような、何かそういう仕掛けを一緒にやりたいと思っています。

**井上** 私はだいたいもうお話ししてしまったのですが、こういう場ですのでやは

りいろいろとお互いの言っていることを聞き合うというのが重要だと感じています。言った者勝ちというのもあるのですけれども、やはり大木さんもいろいろ考えているのだなと感じました。『邪宗門』というと私にとって最も影響された小説のベスト10に入る小説です。素性をお互いに知らないメンツが集まっている話をしていると、底流の部分でつながっていることに気づきます。今、表に出ている考え方とか思想的なものとか、金さんは思想がないとか言うかもしれないけど、そういったものが恐らく見えているだけでもよいのです、そのあたりをつかみ合いの中でやると意外とこのチームの良さが出てきます。今はバラバラでやっているのですけれども、班の取り組みを今回聞かせていただきましたので参考にしたいと思いますし、それを何とか上田のプログラムに入れていきたいと思っています。

**野山** 先ほど小山さんから、ぬくもりのある人間関係でしかコミュニケーションは伝わらないという話がありました。コミュニケーション研究の知見によると言葉そのもので伝達できるのは7%ぐらいしかないという話があります。そうすると、残りは音声と表情、雰囲気  
で90%以上です。パッと見渡す限りここにいるメンバーの雰囲気もだいぶ違いますよね。例えば私がこのセンターに魅力を感じる理由について少し触れます。今日は学長がここにいらっしゃって、センター長の高橋さんがいます。全く違う雰囲気  
の2人がいて、そこに杉澤さんというつなぎ役のコーディネーターの方がいて、この組織は非常に醍醐味が出そうだということを私は感じているわけです。先ほど小山さんが大事なことを言いました。政策を、「思い」から入って丁寧にやっていくことも大切だと。実はプレフォーラムがこの全国フォーラムの前に



あったのですが、皆さんの大半はそこには来られなかったと思います。プレフォーラムは3時間とか4時間とかかけてやった班が多いです。我々の班は特に長い時間をかけ丁寧にやりました。そのことによって実は実りが非常にありました。可能であれば来年はプレフォーラムから来ていただいて、全国フォーラムにも来ていただくと、トータルでそこで語られる物語が非常に分かりやすくなるものと思います。これはもう私の力の及ばないところで恐縮ですが、今日の2時間とか昨日の2時間だけだとどうしても伝え切れない、私あるいは私たちのコミュニケーションの限界があります。忙しい中来ていただくのは大変ですけれども、2回のフォーラムをセットと考えてここに来ていただければありがたいです。

**小山** 多文化ソーシャルワーカー養成、これは大いに結構です。でも、「小山さん、飯は食えるんですか」とよく聞かれます。私も分かりません。だけれどもぜひいろいろな知恵を貸してください。いろいろなりソースを組み合わせて何とか飯の食える制度にしたいと、それだけ伝えて終わりたいと思います。

**山西** 私が言おうとしていたことを小山さんが言ってしまいました。やはり2人は気が合っていると言えるでしょう（笑）。私たちがやっているコーディネーターとかソーシャルワーカーというのは、割とすべての分科会の根底にある役割や機能であって、それぞれからかなりメッセージをいただきやすい分科会となっています。ですから、分科会を超えた協働研究が成立すると思っています。あと一点は、チームのメンバーを超えた会場の皆さんとの協働です。昨日の分科会もそうだったのですが、やはり皆さんそれぞれすごく思いがあって、ただ名称はコーディネーターでなくても実際はそういった役割を担っている方はたくさんいるのです。自分は経験的にこうなんだ、ああなんだということ、昨日も、またプレフォーラムでも、いろいろと意見はいただいています、ただ、わずかのご意見しか私たちの元に届いていません。ですから、もし、自分たちはこう考える、また実際にやってきてこういうふうになっているということがあれば、ぜひとも私たちにご意見を出していただいて、できるだけそのような関係の中で私たちも成果というか、コーディネーターの専門性を構築していきたいと思っています。多くのご意見よろしくお願いします。

**杉澤** ありがとうございます。実は、ここに出てきてくださっている皆さんは、本学が特任研究員ということで委嘱をして、各班の中心者として活動して下さっている方たちです。ただ、各班におきましては、多言語・多文化教育研究センターの運営委員、教職員11人で組織されている運営委員会というものがございしますが、その運営委員がそれぞれの班に2人、3人と入って一緒に協働実践研究

を行っております。そのほかに本学の大学院生が研究協力者として入り、また各現場の方々が発信者として入り、約40人で協働実践研究を展開しております。今日はその代表ということで10人の特任研究員の方にご登壇いただきましたけれども、次回はぜひ各班のメンバーがいろいろな形で発信できるようになるということをお祈りしております。

また、私自身は本学に着任してからまだ1年ちょっとしかたっており、しかも教員ではございませんので、なかなか学内のコーディネーションができる立場ではございません。そういう意味では本センターの運営委員の教員たちが、教員でありながら学内のさまざまな教員たちをつなぎ、そして各プログラムにかかわってもらえるように段取りをしながら、本センターの協働実践として、また社会連携活動などすべての活動が行われているということをお願いしたいと思います。運営委員がまさに学内と外をつなぐコーディネーター役となっています。

この協働実践研究ですが、冒頭に私は協働というのはまさにプロセスの中にしかないのではないかと申し上げました。そういう意味で、研究した成果だけを求めるということではなく、この協働実践研究のプロセスそのものを本にまとめて、皆様にまたお届けし、そしてご意見をいただくという双方向の協働実践研究活動にしていきたいと思っています。各5班の活動は5月末ぐらいまでにプレフォーラム、今回の全国フォーラムの分科会を統合して各班ごとの冊子で発行する予定ですので、ぜひそちらを手にとってご覧いただき、来年度のフォーラムにはまた意見を私たちにいただければ幸いに思います。

最後に、本センターの次の事業の宣伝をさせていただきます。この研究班の活動の成果を、では本センターとしてどういうふうに関与の課題解決に落とし込んでいけるのかという、そのひとつの方法でもあるかと思っておりますけれども、08年度文科省の委託事業として、「コーディネーター養成プログラム」というものを開講いたします。各班の特任研究員の方たちには評価委員として1人ずつ入っていただいて、そしてその他例えば企業で大変活躍をされてきた方とか、国際機関で活躍されてきた方たちにもアドバイザーとして入っていただく形で、このプログラム作りを現在展開しているところでございます。08年夏に開講いたしますので、興味のある方はぜひ参加いただきたいと思っております（資料p. 108、109「多文化社会コーディネーター養成プログラムの概要」参照）。

それでは、時間が押してしましまして申し訳ございません、2日間の全国フォーラムにご参加いただきまして、またご清聴いただきありがとうございます。ありがとうございました。



**伊東** どうもお疲れさまでした。青山さん、私たち、昨日、今日と副センター長ということで司会を、昨日は青山さん、今日は私がやりましたけれども、感想を少し聞かせてください。

**青山** この全国フォーラムですが、06年9月に協働実践研究会というのを初めて開いて、1年たったら全国フォーラムを開きましょうという話になったとき、どんなことになるのだろうかかと本当に心配していたんです。けれども、第一には、代表として演壇に上がられているこちらの10人の皆さん、やはり何ととっても週末の土曜日、日曜日の中を参加していただいた参加者皆さんのおかげで、今回の全国フォーラムは素晴らしい成果を出せた、そういうふうになりました。

**伊東** こんな感じで06年9月から、このメンバーが月1回このような議論をしてきましたので、毎日、頭がいっぱいでした。しかし私たちキャンパスにいながらこういった専門の方たちをお招きして、私の専門の日本語教育以外のことをいろいろと学ぶチャンスがあって、多文化共生社会、いったい世の中の仕組みはどうなっているのか、日本語教育以外のところではどのようなことが起こっているのか非常に勉強になりました。正直、ちょっと今日は、大変でしたけれども、またこれを引き続きやっていきたいと思います。

最後に、亀山学長からの挨拶、感想も含めて1分をお願いいたします。

**亀山郁夫** 2日間にわたる多文化協働実践研究全国フォーラムに多数ご参加いただき、心よりお礼申し上げます。フォーラムで、どんな議論が展開されるのか、私自身非常に強い関心を持っておりました。残念ながら、最初と最後の全体会に出ることができたのですが、最後のお話をうかがいながら、この問題が、人間の言葉、人間の心そしてマイノリティーや出自といったある意味で個人的なレベルの問題から、日本という国家の問題、地球という大きなテーマに大きく広がりを持っていることを改めて感じました。



亀山郁夫

そしてまた、今日ここに登壇されている方々のすばらしい人間的な個性に心を打たれました。こういう方々が、グローバル化の進む日本社会で、足元の国際化というテーマをしっかりと受け止めてくださっていることを知り、意を強くした次第です。私としては、この多言語・多文化教育研究センターが、今後、大学としての存在感そのものであるようなプロジェクトとして末永く発展していくことを祈っております。諸先生方には、これからもさまざまな形でのご指導をいただくことになろうかと存じます。また、センター長にお

かれましてはこれからのますますのご活躍をお願い申し上げます。どうもありがとうございました。

**伊東** 最後に多言語・多文化教育研究センター・センター長の高橋から締め言葉をお願いします。

**高橋正明** この2日間、私はできる限り分科会に出るようにしていたんですけど、残念ながら全部には出られない。どうしてこういう組み立てでやってしまったんだろうと思って後悔しています。やはり全部出たかった。そしてどのセッションももっと聞きたかった、2時間ではとても短い、もっと長く3時間、4時間と聞きたかった話ばかりでした。

分科会でのお話を聞いていて、正直なところ何度も涙が出ました。ふだん、大学での小さな世界での人間関係に半ば嫌気がさしている中で、ああ、日本のそれこそ北から南まで、こんなに頑張っている方が大勢いて、そしてその方たちのお話の裏にはさまざまな歴史とか思いというものがあるんだということが本当に実感できた。この世の中、いろいろ嫌なこともあります（笑）。でも、まんざら捨てたものじゃないな、というのが私のこの2日間の実感です。

佐藤郡衛さんが言いました、「こんなでかいことをやっていいのかよ」と。私も今、そう思っています。自分たちの身の丈に合わないことをやっているんじゃないかと。学生のボランティアで始まったちっぽけな活動がここまでできました。でもそれはそれだけ、今の社会がこうした活動を必要としているのだと思います。わが大学は本当に小さい大学ですけども、さまざまな人たちの活動をつないでいくことはできる。協働などという言葉よりこの「つなぐ」という言葉を使いたいです。「つないでいく」という言葉は今日の方々の分科会でも出ました。この「つなぐ」という役割を、これからも何とかかんとか続けてやっていきたいと思っています。

来年のプレフォーラム、そしてフォーラムにぜひまた皆さん方に、今回の議論を基にした新たな実践の成果をお互いに持ち寄っていただいて、さらに中身の濃いフォーラムになっていけばいいと思っています。土曜日、日曜日という貴重なお時間をこの府中まで足を運んでいただいて、皆さん、本当にありがとうございました。このお礼の言葉をもって、今回の全国フォーラムの締めといたします。



高橋正明